

親子の愛情表現としての「愛し(かなし)」

——『竹取物語』と『うつほ物語』の特異性——

高 橋 早 苗

はじめに

上代と中古のみ活躍し、その後消えていった「愛し(かなし)」という愛情表現がある。『萬葉集』の時代から『源氏物語』の時代にかけて、「かなし」には大きく分けて二つの意味があった。『時代別国語大辞典 上代編』によれば、①「悲しい」と②「いとしい。あわれだ。かわいい」の二義であり、本論では①を「悲し」、②を「愛し」と表記して区別する。「愛し」については、これまで主に『萬葉集』の用法に関して多くの言及がなされ、またその延長線上に『萬葉集』と平安時代の用法の違いを国語学的観点に基づいて指摘するものもある。その際、『源氏物語』の用例が主として取り上げられるといった傾向も見られたものの、近年では、『源氏物語』以外の中古の作品を複数取り上げ、上代から中古に至る「愛し」の動詞化に注目した丁寧な分析も見いだせる。一方、国文学の分野では、平安時代における「愛し」の概観を捉えたうえで作品世界との関わりを見据えながら分析・考察する論は管見の限り見当たらない。本論では、平安文学作品を広く網羅することで、『竹取物語』と『うつほ物語』において「愛し」が特徴的に用いられていることを指摘し、その作品固有の世界との関連性

を読み解きたい。

一、『萬葉集』の時代から『源氏物語』の時代へ

上代の「愛し」の特徴について、横山英「かなし（愛し）」という語について⁵は、『萬葉集』において「愛し」と解すべきものは殆ど巻十四及び防人歌に集中して居り、それ以外には極めて僅かしかない」と指摘する。「それ以外」とは大伴家持の歌であり、横山氏は先行研究に基づき、それらは家持が巻一四を「模した」ものであるという解釈を示している。伊藤博氏も『萬葉集相聞の世界』⁶のなかで「愛し」について「東国特有の語であるといつてよいのである」と述べている。また『古事記』や『日本書紀』など他の上代作品には見られないことも指摘されており、上代において「愛し」は『萬葉集』東歌に集中して表れる表現であり、東国方言と言いうるものであったことがうかがえる。

そもそも「かなし」の原義については、たとえば大野晋氏による「力及ばず、事を果し得ない感じ」⁸という説や、阪倉篤義氏による「求めるものの不在によつて感じる、満たされぬ淋しさであり、空しさ」⁹という説などが広く知られるが、中野方子氏が指摘するように、この二説は「悲哀の（かなし）」については説得力をもつが、愛憐の（かなし）には適用しにくい¹⁰。点は見過ぎせない。一方で「愛しい意味でも悲しい意味でも、また景に対しても用いられる胸痛くなるような思い、痛切な感動」とする野田浩子氏の見解や、「自分の力では如何ともしがたい情動が心に湧き起こってくる状態」という『万葉語誌』の解釈は、「愛し」と「悲し」の両方についてのものであり、「かなし」の原義を「胸痛くなるような思い」「如何ともしがたい情動」としてまずは捉えたい。「かなし」という感情は「悲し」と「愛し」のどちらかに判然と区分することの難しさもはらむものの、上代

の「愛し」の語義をより積極的に示したものとして次のような見解がある。折口信夫氏は次のように述べる。¹³
かなし、或は其語根のかなは、小さい事を意味する語で、小さいものに對する愛情憐愍の心から、かはい
ゝとあはれと、両方に分かれるものと見られて来てゐる。

また松浦照子氏は『源氏物語』の「愛し」について、類似表現「こひし」を取り上げて比較分析したうえで、
次のように指摘する。¹⁴

「かなし」は、親が娘に抱く感情である。好ましいのみならず、強者から弱者へ、大から小へ、弱いもの
小さいものをいづくしむ感情といえる。(略) いわば「こひし」は対等の愛情、「かなし(愛)」は上から下
への愛情といえよう。

つまるところ、「愛し」とは、「小さいものに対する愛情憐愍の心」「強者から弱者へ、大から小へ、弱いもの
小さいものをいづくしむ感情」として捉えられる。このように語義自体は上代から平安へと時代を経ても変わ
らない解釈がなされているが、その対象については寿岳章子氏によって次のような違いが指摘されている。¹⁵

次に言及すべきは、源氏に於ける「かなし」である。(略) 萬葉時代と似てゐるやうですぐ気付くのは、か
つては異性同志の間の感情表現であつたものが、こゝでは親と子、乃至は孫に對するもの、或いはそれに
準ずるものとの關係に於て成立する語となつてゐることである。

寿岳氏の指摘は管見の限りでは嚆矢にあたる。確かに「多摩川にさらす手作りさらさらになにその兎のこ
こだかなしき」(『萬葉集』卷一四・三三七三)¹⁶といったように、『萬葉集』では「愛し」は、夫婦間あるいは
恋人同士において、主として妻あるいは恋人の女性に用いられている。男性に用いる場合もあり、また「父母
を見れば貴く妻子見ればかなしくめぐし」(『萬葉集』卷一八・四一〇六)のように子に用いる例もないわけ
はない。だが上代においてこの表現は、用例数から見ても主として男女間での感情表現であると言える。それ

に対して、平安時代に入ると後に詳述するように、男女間のものも僅かに見られるものの、ほとんどが親と子・孫（それに準ずるもの）間での感情表現となっている。男女間で用いられることの多かつた表現が、平安に至るとなぜ親子・孫間で多用されるようになるのか、その変化の背景には平安時代の「愛し」が和歌よりも散文で多く見られるという傾向もあるいは関わってくるのかもしれないが、これ以上の言及は控えておく。中世に入ると「悲し」の方は残るものの、「愛し」は消失していき、新たに〈貧しい〉という意味の「かなし」が加わることが既に明らかにされており、「愛し」は、ある時代にのみ活躍した愛情表現であったと言えるよう。

本論では、『萬葉集』の「愛し」への言及が多いなか、平安時代における用例を網羅したうえで平安時代における親子・孫間での「愛し」について、『竹取物語』『うつほ物語』にやや特異な用い方が見られることを明らかにし、作品世界との繋がりを論じたい。

二、平安時代の「愛し」

平安時代に入っても「かなし」のうち主流の座についていたのは悲哀の情を表す「悲し」であったが、東国方言のようなものであった「愛し」も依然として用いられ、この時代には広く散文作品に確認できるようになる。ただし先に紹介したように、前時代において男女間で用いられていた「愛し」は、平安時代に至ると親子・孫の間で使用されるようになる。おそらくこうしたことが踏まえられ、『日本国語大辞典（第二版）』では「愛し」について「男女、親子などの間での切ない愛情を表わす。身にしみていと美しい。かわいくてたまらない。いとしい。」という記載がなされたのだろう。²¹「男女、親子などの間での切ない愛情を表わす」というのは、上代と平安での用法を適切にまとめたものだと言えるが、興味深いのは「親子などの間」といった表現である。と

いうのも、「愛し」について言及する他の論では、これとは少々異なる言い回しが見られるからである。『王朝語辞典』における「かなし」の項（山口仲美氏による²²⁾）を見てみたい。

平安時代の「かなし」には、現在に継承されなかった別の系列の意味がある。「かわいい」「いとしい」と訳しうるような意味で、「愛し」と書いた方が適切な場合である。「父母を見れば貴く 妻子見ればかなしくめぐし」（一八・大伴家持・四一〇六）とある。「かなし」は、妻や子供に対するいとおしみの気持。古くは肉親や恋人をせつないまでにかわいく思う気持をも表わしたのである。『万葉集』の東歌や防人歌では、多くこの意味で「かなし」が用いられている。平安時代になっても、「四十人の子どものかなしく、千人の眷属のかなしきによりて、汝が命をゆるし」（うつほ・俊影）のように、せつないままでのいとおしみの心を表わす「愛し」の例は見られる。

やや長めに引用したのは、意味用法や時代の推移に伴う消失も含め、「愛し」について見事にまとめたものだと思うからだ。ここで「妻や子供に対するいとおしみの気持」となっている点に目を向けたい。『日本国語大辞典（第二版）』では「親子などの間」と記されているのに対し、踏み込んだ説明のなされる論述では「子供に対する」といったように一方向に限る記述となるのであり、それは深水洋子「形容詞の意味の変遷——「かなし」とその周辺——」²³⁾においても同様である。深水氏は「愛情表現の「かなし」の使用法は、親から子へ、男から女への「かわいい」「いとしい」である」と述べており、ここにも「親子」ではなく「親から子へ」という方向性が示されている。²⁴⁾これは、次に挙げるように、平安文学作品における全体の傾向を捉えたとき正確な表現であり、平安一般の「愛し」の意義を言い当てていると言えるのだが、一方でそれによって埋もれてしまう作品があることは見過ごせない。以下、平安時代の「愛し」の概観を把握するために、平安文学作品における「愛し」の用例数とその対象を示す。

〈表一〉平安文学作品（散文）における愛情表現としての「愛し」の用例数と対象

大鏡	夜の寝覚	更級日記	栄花物語	源氏物語	枕草子	落窪物語	うつほ物語	蜻蛉日記	平中物語	大和物語	伊勢物語	竹取物語	作品／対象
3	13	1	17	20	5	12	20	4			1		子
4	4		2	4		2	5						孫
				2 (妻子)			6, 1 (妻子)				1		妻
							4 (親) 1 (親子) 1 (母の縁) 1 (親族)					1 (親)	その他
7	18	1	21	26	5	14	39	4	0	0	2	1	総数

〈表一〉を見ると明らかのように、平安文学作品において「愛し」の対象は圧倒的に子・孫である。前時代に主流であった妻に対する「愛し」は、たとえば「まして、近く見では、いま千重まさりて、あはれにかなしく思はえて」（『うつほ物語』俊蔭・二七頁）や、「父母にもあひ見ず、かなしき妻子の顔をも見で死ぬべきこと」

『源氏物語』明石・②(二二五頁)といったように見出せるものの、主流はやはり子・孫に対するものであると言ってよいだろう。具体的には次のような用例が見られる。

① 『伊勢物語』(八四段)

その母、長岡といふ所にすみたまひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまう
でず。ひとつ子にさへありければ、いと **かなしう** したまひけり。(一八八頁)

② 『蜻蛉日記』(下巻 天延二年二月) *養女に対する思い

あはれなる人の、身に添ひて見るぞ、わが苦しきも紛るばかり **かなしう** おほえける。(三三四頁)

③ 『うつほ物語』(吹上・下) *妻を亡くし、息子・忠こそを溺愛する橘千蔭について

「…母なき男子の、かたち・心すぐれたるを持ちて、限りなく **かなしく** し給ひ、君も二つなく顧み給ふ人
(略)」(二九五頁)

④ 『落窪物語』(巻二) *男主人公について

児におはしけるより、この少将を、世になく **かなしう** したてまつりたまふに、人に誉められ、帝もよき人
に思し召したれば (略)。(一六七頁)

⑤ 『枕草子』(二四九段)「世の中になほいと心憂きものは」

下衆などのほどにも、親などの **かなしう** する子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおほゆれ。見る
かひあるはことわり、いかが思はざらむとおほゆ。ことなる事なきはまた、これを **かなし** と思ふらむは、
親なればぞかすとあはれなり。(三八〇頁)

⑥ 『夜の寝覚』(巻二) *娘の楽の音を聞いた父親の反応

ただひとわたりに、限りなき音を弾きたまふ。「この世のみにてしたまふことにはあらざりけり」と、あは

れにかなしく思ひきこえたまふ。

(一六頁)

⑦ 『大鏡』(三条院) *娘の一品の宮に対する三条院の思い

この宮をことのほかにかなしうしたてまつらせたまうて、御髪のいとをかしげにおはしますを、さぐり申させたまうて(略)。(五〇頁)

①②は母親の子に対する思いであり、③⑥⑦は父親によるもの、④⑤は両親の思いである。親の性別によらず、子や孫に対する慈しむような感情が「愛し」によって表現されている。また日記や物語、随筆といったいわゆるジャンルを問わず、広く散文作品に用いられていることも確かめられよう。さらに『伊勢物語』から『大鏡』に至る約二百年もの間あまねく散見されることから、「愛し」はまさに平安の世を生きた表現であったこともうかがえる。そのうえで〈表一〉からは、こうした〈親から子・孫へ〉といった方向とは正反対の用例が確認できることは見過ごせない。『竹取物語』と『うつほ物語』には、〈子から親へ〉といった用例が見られるのであり、次節ではその点について考察する。

三、『竹取物語』の「愛し」

平安時代に主流であった〈子・孫〉に向けられる「愛し」に対して、〈親〉にその思いを抱く『竹取物語』と『うつほ物語』は、この時代の一般的な用法から見るとやや特異であると言える。もともと、この二作品を前時代から次の時代に至る過渡期の例として捉える見方もありえよう。というのも『うつほ物語』には、〈親〉に対する用例(四例)と同時に、〈子・孫〉に対する用例(二五例)も見られるからである。よって前時代とは異なり、「愛し」が子・孫に向けた感情表現として定着していく過程に派生した例外として、二作品を位置づける

ことも可能だろう。だが「愛し」の語義が、第一節で確認したような「小さいものに対する愛情憐愍の心」「強者から弱者へ、大から小へ、弱いもの小さいものをいづくしむ感情」というものだからこそ妻や恋人に用いられたのだとしたら、そうした思いを〈親〉に対して抱くことを語る『竹取物語』と『うつほ物語』は、やはり特異であると言わざるを得ないのではないか。本節では、この二作品における〈親〉への「愛し」の用例を検討することを通して、こうした用いられ方をするに至った背景を明らかにしたい。

『竹取物語』において問題とする用例は一例のみであり、それはかぐや姫昇天という非常に重要な場面に見出せる。

⑧ 今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

とて、壺の薬そへて、頭中将呼び寄せて奉らす。中将に、天人とりて伝ふ。中将とりつれば、ふと天の羽衣うち着せてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。(七五頁)

羽衣を身につけることで「物思ひ」がなくなり、人間的な感情を失って天に昇っていくかぐや姫の悲劇的な姿が描かれる⑧の場面については、従来、天上界と人間界との「絶対的な隔絶」というものが野口元大氏によって読み取られ、広く支持されてきた。特にかぐや姫が天へと帰るその時になって「今はとて…」と帝に吐露した「あはれ」の情は、人間的なものの代表格としてその後注目されてゆく。たとえば鈴木日出男氏は「歌中の「あはれ」は、「もの知らぬ」とは対極的な語」としたうえで、かぐや姫は「人間であることをやめる直前になって、帝を思つて最も人間的になりえた瞬間の感動を歌いあげている」と述べる²⁶⁾。また、「ここには、「あはれ」は、人間が人間であるための根拠である、という強い主張が読み取れる」とする高田祐彦氏は、そうした『竹取物語』の世界と、「人間への執着の問題が「あはれ」と絡まりながら作品の表面に躍り出てきたという物語の

動態」を見せる『源氏物語』との繋がりを丁寧読み解く。²⁷ これらの指摘に加え、作品内においてかぐや姫が少しずつ「あはれ」を獲得していく過程が描かれていることも踏まえると、確かに『竹取物語』において「あはれ」は人間存在に関わる重要な鍵語として登場していよう。その一方で、この場面においてかぐや姫が天の羽衣を着せかけられた直後に「翁をいとほし、かなしと思しつることも失せぬ」という一文があることは見過ごしがたい。「思しつることも失せぬ」とあることから、かぐや姫が失った人間的感情として、まずは「あはれ」の情があることは動かしがたいが、それに加えて「いとほし、かなし」も挙げられているのである。この点について野口元大氏は次のように述べる。²⁸

天上来というのは、「もの思ひ」のない世界なのである。(略)「翁を『いとほし、かなし』と思しつることも失せぬ」とあることによって、はっきり確認できるように、現実界では最も人間的な美しい感情と認められ、ことに当時の社会通念では最高の道徳とされていた、孝²⁹親子の愛情さえも否定されなければならぬ世界なのである。永遠の世界の純粋な理性の光に照らせば、愛憎にかかわらず、一切の執着は迷妄であり、解脱されねばならぬ絆でしかないのであった。

野口氏は、かぐや姫と帝の間に生じた「あはれ」の情愛のみならず、翁に向けられた「いとほし、かなし」をも「人間的」な感情として取り上げており、そうした「現実界では最も人間的な美しい感情」すらも「執着」「迷妄」として否定されねばならない天上来の冷酷さを指摘する。首肯すべき見解だろう。ただ野口氏は「いとほし、かなし」を「親子の愛情」「孝」としているが、ここでかぐや姫が抱いた感情を単に親に対して抱くものとしてのみ捉えてよいのだろうか。まず「いとほし」だが、確かにこの場面以外にあと一例見られる「いとほし」は、「親のたまふことをひたぶるに辞びまうさむことのいとほしさに」(三〇頁)とあるように、親の頼みを断るのは「いとほし」く感じたから求婚者達に難題を出したのだ、とかぐや姫が述懐する場面に見られ、

一見すると親への思いとして捉えられる。とはいえ、かぐや姫がその時抱いた「いとほし」とは「気の毒だ」「翁がかわいそう」³⁰⁾というものである点に注意したい。さらにこの昇天場面におけるかぐや姫が、人間として目覚めつつ、しかし人間を超えた存在として描かれていることを踏まえると、「翁を、いとほし、かなし」と思いつることも失せぬ」という一文における「翁」とは、単に育ての親を意味するだけでなく、いたわるべき慈しむべき存在としても位置づけられているのではないか。ここでかぐや姫が失った「いとほし、かなし」とは、単に人間的な感情というだけでなく、親としての翁というよりもいわば人間一般に注がれた情愛とでもいうべきものだと考えられる。それは、おのれの出自を理解したかぐや姫が、人間界ならではの感情を持つと同時に高みから人間を見つめる天上界のまなざしをも持つ者だからこそ抱くことのできた感情だったのだと言える。『竹取物語』における「愛し」が、平安時代一般の用法とは一見異なるのは、こうした背景があるからだと思われる。

四、『うつほ物語』の「愛し」

『うつほ物語』には〈子・孫〉に対する「愛し」と〈親〉に対する「愛し」とが共存する。〈親〉に対する「愛し」（親への四例に「親子」の一例を加えた全五例）は俊蔭巻と国譲上巻に集中する。一方、〈子・孫〉に対する「愛し」（全二五例）は作品全体を通じて見られ、俊蔭巻と国譲上巻にも「四十人の子どものかなしく」（俊蔭・一二頁）や「子といふものは、かくかなしきものにこそありけれ」（国譲上・六七〇頁）といったように確認できる。このように平安時代一般の「愛し」が『うつほ物語』にも多く見られるなか、作品前半に現れる〈親〉への「愛し」とはどのようなものなのか、考察していきたい。

親に対する「愛し」は藤原俊蔭とその孫の仲忠（いずれも俊蔭巻に三例）、源実忠（国譲上巻に二例）に関わって見出せる。まずは仲忠の用例を見ていく。

⑨ 俊蔭の娘が産んだ子・仲忠は、立派に成長する。

心の聡くかしこきこと限りなし。かくいときなきほどに、親の苦しかるべきことはせず、「親は、**かなしきものなり**」と思ひ知りたり。
(俊蔭・三六頁)

仲忠は、幼いながらに母の困るようなことは決してせず「親は、かなしきものなり」という思いを抱いていたという。彼が「変化の者」（俊蔭・三八頁）であることに目を向ければ、人間を超えた存在という、『竹取物語』のかぐや姫と共通する面も見えてこよう。だがここに描かれるのは、生活を支えてくれる者もおらず窮迫した生活を送る親子の状況であり、母のために懸命に食糧を求める仲忠にとって、母はまず守るべき「弱いもの小さいもの」すなわち「愛し」と認識する対象であったということだろう。そのうえで、この作品において仲忠がこうした思いを抱くのは、彼が「いとかしこき孝の子」（俊蔭・三五頁）として描かれることと無縁ではない点を見過ごしてはなるまい。

こののち仲忠が食糧を探すと様々な奇瑞が生じ、彼らは無事に飢餓状態を脱することができる。それが⑨に続く三つの挿話によって示されるのであり、それらは「孝子仲忠の活躍³¹」を語るいわゆる孝養譚として位置づけられている。仲忠は、三つの孝養譚においてそれぞれ「まことに我孝の子ならば」（俊蔭・三七頁）、「わが身不孝ならば」（同・三八頁）、「まろは、孝の子なり」（同・三九頁）と、ことあるごとに孝子であるか否かを問う、結果的に奇瑞を起し続けるのであり、これらの挿話によって彼がまさしく「孝の子」であることが決定づけられる。注目したいのは、ここで仲忠の〈孝心〉と「親は、かなしきものなり」という思いが重なり合うものとして描かれることだ。この点について山本登朗氏は次のように述べる。

「変化のもの」である仲忠は、母親の慈愛を受けつつ、早くから「親は愛しきものなり」と思い知っていたが、その心情自体はあくまでも「孝」とは次元を異にする、人間的で自然な感情であった。(略)人間の自然な感情だけでは超自然的な奇瑞はおこりにくく、奇瑞をおこすためには「孝」という言葉がことさらに口にされる必要があった。主人公仲忠の一見奇妙にも見える発言は、宇津保物語全体の基調をなす「親子の愛しさ」という人間的感情に、「孝」という次元の異なる概念を結び付け、それによってこの宇津保物語の世界の中に孝子伝と同じ奇瑞を出現させるために、やはり必要な言葉だったと考えられるのである。⁽²⁸⁾

山本氏は親に対して「愛しきもの」という思いを抱く仲忠が、「我孝の子ならば」といった発言を繰り返すことに注目し、それによって奇瑞が生じるという展開でもって、「親子の愛しさ」という人間的感情に、「孝」という次元の異なる概念を結び付け」と指摘する。「愛し」という感情と「孝」という精神が『うつほ物語』作者にとってどれほど「次元の異なる」ものという意識があったかは定かではないものの、この作品において「愛し」と「孝心」とが結び付き重なり合うものとして描かれているという見解は首肯できる。『竹取物語』においても、先に紹介したように野口元大氏によって「愛し」は「孝」親子の愛情とされてきたが、それが読者の側の解釈であったのに対し、『うつほ物語』はまさに作品側が提示する論理であることは注目してよいだろう。仲忠が窮状に陥った母を「愛し」と思うのは、この作品における「愛し」がただ「弱いもの小さいものをつくしむ感情」を意味するにとどまらず、親を敬い養い尽くしたいという子の報恩の思い(孝心)をも意味内容に包括しているからだと考えられる。

こうした『うつほ物語』における「愛し」の特質は次の用例⑩にもうかがえる。⑩は第三の挿話(孝養譚)に現れた「愛し」である。

- ⑩ 仲忠、牝熊・牡熊に命を奪われそうになり、涙ながらに訴える。

牝熊・牡熊、荒き心を失ひて、涙を落として、親子のかなしさを知りて、二人の熊、子どもを引き連れて、この木のうつほをこの子に譲りて、異峰に移りぬ。
(俊蔭・三九頁)

この挿話は、食糧を求めていた仲忠が子連れの「牝熊、牡熊」に食われそうになったとき、母のために自分は死ぬわけにはいかないが、体のうち「親を養はむに用なき所」(俊蔭・三九頁)はさしあげようと告げたところ、熊は「荒き心を失ひて」住んでいた杉のうつほを仲忠親子に譲ったというものである。ここで注目したいのは、この挿話はただ仲忠が孝子であることを語るだけでなく、獣にまでも「親子のかなしさ」を「知」らせるような存在であることを語る点である。実は⑩の挿話には典拠があるとされており、その典拠となった舟橋家本『孝子伝』の揚威孝養譚(上・一六話)における獣(そこでは虎)の反応は、「虎閉目低頭棄而去³⁴」と記されるのみである。むろん『孝子伝』において、虎が母を思う揚威の心すなわち〈孝心〉に感銘を受けたであろうことは、目を伏せ頭を下げて去るという、その動作からうかがえるのだが、それを「親子のかなしさを知」ったがゆえと表現・明示するのが『うつほ物語』なのである。『うつほ物語』において仲忠の訴えを聞いた獣は、親の慈愛に報いようとする子の〈孝心〉すなわち「親子のかなしさ」を思い知るのであり、仲忠は「荒き心」の獣にまで「愛し」の思いを認識させる人物なのであった。

このように仲忠は生まれながらにして親に「愛し」という思いを抱き、それを実行に移してきたが、その祖父にあたる俊蔭が抱く「愛し」は見出せない³⁵。従来、この二人は「孝の子」仲忠と「不孝の子」俊蔭として「対蹠的」な関係にあると捉えられていることから、「愛し」と〈孝心〉の結び付きを考えたとき、「愛し」と思う仲忠と思わない俊蔭という図式は当然だと思えるかもしれない。だが俊蔭以外の人に用いられる、俊蔭をめぐる「愛し」の用例は、俊蔭をただ「不孝の子」とのみ捉えることをためらわせるものである点に注目したい。

⑩ 一番目の山の主(七仙人の一人)、俊蔭と話をしたあと二番目の主に紹介する。

俊蔭、初めよりのことを、くはしく申す時に、旋風、例の琴どもを、皆同じごとく置きつ。その時に、山のあるじ、俊蔭が琴の音を試みて、かなしび給ひて、俊蔭と連ね給ひて、二つといふ山に入り給ふ時に、その山のあるじめづらしがり給ふ。客人の聞こえ給ふ、「あやしう、『蓮華の花園より』と言ふ人のありつれば、母の恩のかなしく、乳房の恋しきになむ率て参りつる」とのたまへば、あるじあはれがりて、三人連れて、三つといふ山に入り給ふ。
(俊蔭・二五頁)

親を嘆かせている自分自身について「不孝の人」(俊蔭・一二頁)と自覚する俊蔭は、西の花園で天人の降下を受けたあと、さらに西に進んで七人の仙人に会う。こののちも俊蔭が「不孝の人」でなくなることはないのだが、「孝心」という点で興味深い例を示すのが右の用例⑩である。⑩において俊蔭を迎え入れた仙人「山のあるじ」は、さらに次の仙人に俊蔭を紹介する際、母のいる西の花園から来た俊蔭によって「母の恩のかなしく、乳房の恋しき」に駆られて、こちらに連れてきたと述べる。「乳房」とは「母の慈愛の象徴的表現」であること³⁷を踏まえると、ここでの「母の恩」と「乳房」はほぼ重なるものだろう。仙人は慈愛を受けた母への恩を「恋しく」「かなしく」思ったのであり、この思いも用例⑨⑩と同じく「孝心」に繋がると言える。

見過ごせないのは、この直前に俊蔭の琴の音を耳にして「かなしび給」う仙人の姿が語られることである。「愛し」の動詞である「かなしぶ」はここでは「非常に感動」「感心」³⁸などと訳されている。実は「愛し」は「いとしい。あわれだ。かわいい。」と解釈される延長線上に、「感慨を催す」といった解釈がふさわしい用例があることも指摘されており、この用例もそれにあたるとされてきたのだろう。だが、⑩において俊蔭の琴の音に「かなしぶ」仙人が、続けて「母の恩のかなしく」と発言することの繋がりに目を向けると、この「かなしぶ」は単なる「感動」ではなく、琴の音により「母への思いを呼び起こされ心が動いた」と解釈できる、すなわち親に対する「愛し」に近い表現として捉えうるのではないか。だとすれば、俊蔭という人物は自身は

確かに「不孝の人」かもしれないが、相手に（孝心）を起こさせる人物であるという点で、獸に「親子のかなしさ」を「知」らした孫の仲忠に通じる要素を担っているとと言える。

以上が俊蔭巻に見られる親への「愛し」の用例であり、そこからは対照的に描かれると同時に重なり合う俊蔭と仲忠の姿が浮かびあがってくる。一方、国譲巻に見られる源実忠をめぐる用例はいずれも彼の父親の発言である。

⑫ 源季明は病にかかり、長男・次男を呼び寄せ三男（宰相・実忠）の身を案じる。

民部卿の君・中將の君などに聞こえたまふ、「略」さては、宰相に、わが非常の時にもあひ見でやみぬべきか、いかに思ひたるぞ、世の中に「かなしきもの」は、親をこそ言へ、そが上も知らず、さてもありぬべかりし身をも捨ててあるは、いかなるにかあらむ（略）」
（国譲上・六二五頁）

⑬ 病床の源季明は、三男（実忠）を厳しく叱責し、久しぶりの再会に冷淡だとなる。

おとど、「いとあやしかなり。はや、求めさせよ。すべて、現し心もなき人にこそあめれ。まづは、我、かく世の果てに、年ごろありて会ひたるをも、『殊に「かなし』』とも思ひたらざめるをや。いと悲しき人にもあるかな」とのたまへば、涙を雨のごとくこぼす。
（国譲上・六二八～六二九頁）

実忠の父・源季明は、あて宮内入後に山に隠棲してしまった実忠を思い、「愛し」といった発言を繰り返す。だがこれは子に対するそれではなく、子が親に向けるべき「愛し」という思いを実忠が示さないことへの不満であり、訓戒である。「世の中になしきものは、親をこそ言へ」（用例⑫）とは、病という「わが非常の時」にすらも親に会いにこない実忠を責めるものであり、だからこそ実際に再会しても「殊にかなし』とも思」わない様子（用例⑬）の実忠を戒めようとするのである。ここにも子は親に孝養するものという考の精神がうかがわれ、その精神の象徴として「かなし」があることが確認できよう。俊蔭巻と異なり、この巻では「考の子」

や自らを「不孝の子」と嘆く子はおらず、親によって考のあり方を責められる子が描かれるのである。¹¹

以上述べてきたように、『うつほ物語』では親が子に「愛し」という思いを注ぐのみならず、子も親に「愛し」という思いを向けた用例が見出せる。親と子の両者が「愛し」の対象となるのは、そこに〈親が子を慈しみ、子はその恩に報いようとする〉¹²という孝の精神が結びついているからだろう。「親子のかなしさ」という表現が登場し、また親が子に「愛し」と思うよう求める発言も見られるのは、こうした背景があるからだと考える。

おわりに

平安時代において親子の愛情表現として捉えられる「愛し」は、厳密に言えば〈親から子へ〉向けられる感情であるのが一般的で、その逆の〈子から親へ〉というのは『竹取物語』と『うつほ物語』にのみ見られる希有な用法である。本論では、人間界と天上界との隔絶を描こうとした『竹取物語』、孝の精神の流れる『うつほ物語』というそれぞれの作品世界との繋がりから、両作品において〈子から親へ〉の「愛し」が用いられた背景を読み解いた。

なお、『うつほ物語』が「愛し」を親に対して用いた背景に、先行する『竹取物語』の用例が作用していたかについては、両作品における「愛し」の内実は異なるがゆえに即断できないものの、前例の存在は見逃しきれないものがある。『竹取物語』から『うつほ物語』へと継承がおそらくは様々な面においてなされたなかで、〈親〉に用いるという形式が受け継がれた可能性もあるいは考えられよう。ただし、その後の平安文学作品において〈親〉に「愛し」の思いを抱く人物が描かれることはない。「愛し」はあくまでも〈親から子へ〉と注がれる愛情表現として定着していくのであり、それだけに独自の「愛し」を生み出した『竹取物語』と『うつほ

物語』の特異性に目を向けたのである。

注

- (1) 『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂、一九六七)。
- (2) 長江稔「万葉「かなし」考」(『解釈』七―五、一九六一・五)や河野頼人「萬葉集東歌に於ける「かなし」の独自性にふれて」(『国文学攷』三九、一九六六・四)、横山英「萬葉集相聞覚書―東歌の用語二、三に關連する問題―」(『静岡女子短期大学紀要』二、一九五五・二二)、同「かなし(愛し)という語について」(『同』五、一九五八・一二)、阪倉篤義「「かなし」の意義」(『春日和男教授退官記念 語文論叢』桜楓社、一九七八)など。
- (3) 滝口美穂「古語「かなし」についての考察」(『清心語文』一四、二〇一二・九、三六頁)は、中古に見られる現象として「愛情の意味について「かなしくす」という動詞」の「派生」を指摘する。
- (4) 平安時代の用例を概観してはいないものの、一作品における「かなし」の考察については、沢田正子「蜻蛉日記の「かなし」の消長」(『国語語彙史の研究』一四、一九九四・八)など優れたものもある。
- (5) 前掲注(2) 横山英論文「かなし(愛し)という語について」(二二〇頁)。
- (6) 伊藤博「萬葉集相聞の世界」(塙書房、一九五九、九六頁)。
- (7) 前掲注(3) 滝口美穂論文。
- (8) 大野晋『日本語の年輪』(有紀書房、一九六一、一〇六頁)。
- (9) 前掲注(2) 阪倉篤義論文(二五頁)。
- (10) 中野方子「かなし」(近藤信義編『修辭論』おうふう、二〇〇八、三三〇頁)。
- (11) 野田浩子「うら」(『古代語を読む』桜楓社、一九八八、四三頁)。
- (12) 中嶋真也「かなし」(多田一臣編『万葉語誌』筑摩書房、二〇一四、一一五頁)。

- (13) 折口信夫『折口信夫全集一九 国語学篇』(中央公論社、一九五五、四二〇頁)。
- (14) 松浦照子「「かなし」を中心とする感情形容詞の一考察―『源氏物語』を資料として―」(『国語学研究』一八、一九七八・一二、五七頁)。
- (15) 寿岳章子「多義成立の一考察―「かなし」の語史と關聯して―」(『西京大学学術報告(人文学報)』一、一九五二・二、二二―二二頁)。
- (16) 『萬葉集』の本文引用は、『萬葉集 訳文篇』(佐竹昭広・木下正俊・小島憲之、塙書房、一九七二)に拠る。『竹取物語』『伊勢物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『夜の寝覚』『大鏡』『平家物語』は小学館の新編日本古典文学全集(以下「新編全集」)に拠る。また、『うつほ物語』は『うつほ物語全 改訂版』(室城秀之、おうふう、二〇〇一)に拠る。
- (17) 男性が女性に用いるものというまとめが多いなかで、西村亨「王朝恋詞の研究」(慶應義塾大学言語文化研究所、一九七二、三一四―三一五頁)は、『萬葉集』の歌「手結濁潮満ち渡るいづゆかもかなしき背ろが我がり通はむ」(巻一四・三五四九)を挙げ、「女性が男性に対する場合にもかなしということばを用いることができる」と指摘する。
- (18) 前掲注(2)横山英「かなし(愛し)」という語について」は、平安時代に入ると「愛し」は「和歌の中には全くいつてもよいほど用いられていない」(二二頁)と指摘したうえで、『古今集』にみられる「愛し」の用例として二例(巻二〇・東歌・一〇八八/巻二〇・東歌・一〇九六)を挙げ、「古今集でも東歌なるがゆえに特に万葉集の例にならつて「愛し」という語を用いて詠んだもの」(二二五頁)と『萬葉集』との影響関係を指摘する。
- (19) 「愛し」の消失については前掲注(15)寿岳章子論文など。ただ『平家物語』には「子のかなしも様にこそより候へ(子がかわいいのも事と次第によつてです)」(巻一〇・請文・二七三頁)といった例も見られる。また前掲注(3)滝口美穂論文によれば、中世においても動詞「かなしむ」には「愛し」「悲し」両方の意味がみられるという。中世に入って見られる「貧しい」という義の「かなし」については佐竹昭広「意味の変遷」(『岩波講座日本語 九 語彙と意味』岩波書店、一九七七)などに詳しい。
- (20) 木之下正雄『平安女流文学のことば』(至文堂、一九六八、四五頁)。
- (21) 『日本国語大辞典(第二版)』(小学館、二〇〇〇～二〇〇二)。

- (22) 山口仲美「かなし」(『王朝語辞典』東京大学出版会、二〇〇〇、二二二頁)。
- (23) 深水洋子「形容詞の意味の変遷——「かなし」とその周辺——」(『国文白百合』一〇、一九七九・三、六九頁)。
- (24) 前掲注(10) 中野方子論文も平安時代の用法について「父母の子に対する情に固定されることが多くなる」とする(三二四頁)。
- (25) 野口元大「解説」(新潮日本古典集成「竹取物語」新潮社、一九七九、一〇九頁)。
- (26) 鈴木日出男「竹取物語」の本性」(『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三、六八八頁)。
- (27) 高田祐彦「古今・竹取から源氏物語へ——「あはれ」の相関関係——」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三、七二頁、七六頁)。
- (28) 難題求婚譚で自分のために死んだ石上中納言に対して「少しあはれ」と初めて思うなど、かぐや姫の「人間化」の過程が描かれており、その際「あはれ」が効果的に用いられている。前掲注(25) 野口元大論文に言及がある。
- (29) 前掲注(25) 野口元大論文(一一〇～一一一頁)。
- (30) 新編全集『竹取物語』三〇頁の頭注四。
- (31) 新編全集『うつほ物語』①七二頁の頭注。
- (32) 山本登朗「親と子——宇津保物語の方法——」(『ことばとことのは』和泉書院、一九九九、二三一～二三三頁)。
- (33) 阿部恵子「仲忠孝養譚について——その出典及び俊蔭巻での構想上の位置——」(『実践国文学』三、一九七三・三)。
- (34) 京都大学図書館蔵本(データベース)による。
- (35) 間に位置する仲忠の母である俊蔭の娘に関しては、兼雅(若小君)との恋物語において、恋人に対するものとしての「愛し」が数例確認できる。
- (36) 大井田晴彦「長編物語の誕生——「俊蔭」の成立と構想——」(『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二、一八頁)。
他にも齋藤正志「藤原仲忠に関する表現と構想」(『二松』四、一九九〇・三)、前掲注(33) 阿部恵子論文など。
- (37) 新編全集『うつほ物語』①三二二頁の頭注七。
- (38) 新編全集『うつほ物語』①三二二頁。
- (39) 講談社学術文庫『宇津保物語・俊蔭(全訳注)』七一頁。

- (40) 日本国語大辞典（第二版）の「③関心や興味を深くそそられて、感慨を催す。心にしみて感ずる。しみじみと心を打たれる。」にあたる。前掲注（22）山口仲美論文は「愛し」の系列と考えられる例として「うっとりとするような喜びの気持」「ありがたい」とでも訳しえようか」と紹介する（二二二頁）。
- (41) その後、物語後半に至ると親への「愛し」は見られなくなり、子への「愛し」と共に、音楽の演奏に対する賞賛としての「愛し」の例が数例見られるようになる。そこに物語前半で見られた親への「愛し」あるいは考の精神が関わるのかどうか、今後の考察が必要となろう。
- (42) 道端良秀『仏教と儒教倫理』（平楽寺書店、一九六八、九二頁）。